

5 畜 産

項 目	作 業 内 容									
<p>(1) 飼料用イネ、飼料用米の収穫・調製</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○飼料用イネ、飼料用米の収穫・調製 ○秋まき飼料作物のは種 ○稲わらの収集 <p>ア 飼料用イネ（稲発酵粗飼料（WCS）用イネ）</p> <p>WCS 用イネは、栄養価や収量を考慮すると糊熟期から黄熟期が収穫適期とされ、従来品種の黄熟期の目安には、出穂後の日数（表 1）のほかに、穎の半数が黄化、穀粒は葉緑素が消失して黄色となり爪で容易に破碎できる状態、胚乳のロウ状等がある。黄熟期の水分はサイレージ調製に適した 65%以下のものが多いが、降雨直後の収穫は水分が高くサイレージの発酵品質が低下するので避ける。また、牛の嗜好性や消化率が高い極短穂茎葉型品種（表 2）は、刈り取りステージが進んでいても消化率が低下しないため、早刈りをせずに糖含量が十分に高まる出穂後 40～70 日以降の収穫が望ましい。</p> <p>表 1 WCS 用イネの黄熟期の目安（出穂後日数）</p> <table border="1" data-bbox="475 1137 1372 1238"> <thead> <tr> <th></th> <th>早生品種</th> <th>中生・晩生品種</th> <th>モミロマン</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>出穂後日数</td> <td>25～30 日</td> <td>30～40 日</td> <td>40～50 日</td> </tr> </tbody> </table> <p>表 2 極短穂茎葉型品種</p> <table border="1" data-bbox="475 1288 1372 1366"> <tr> <td>たちあやか（中生）、たちすずか（晩生）、つきはやか（早生）、つきあやか（中生）、つきすずか（晩生）、つきことか（極晩生）</td> </tr> </table> <p>収穫において、刈り落とし後に圃場で予乾作業を行う場合は、2～4 日間程度の晴天を見込み、土砂の混入や粃の脱粒による品質、栄養価の低下を防ぐため過度の反転は控える。イネは茎が強く中空構造で嫌氣的条件を作るのが難しく、付着する乳酸菌も少ないため、サイレージ調製では乳酸菌製剤等の添加が望ましい。ロールベールサイレージにする場合は、フィルムの巻き数は 6 層巻を基本とし、収穫翌年の夏を超えて利用する場合は 8 層巻にする。</p> <p>また、長期間の保管では、防鳥ネットやテグス等を利用した鳥害対策（写真 1）を講じる。ネット等はロールベールに密着させないよう</p> <div data-bbox="981 1668 1401 1982" data-label="Image"> </div> <p>写真 1 ネットによる鳥害対策</p>		早生品種	中生・晩生品種	モミロマン	出穂後日数	25～30 日	30～40 日	40～50 日	たちあやか（中生）、たちすずか（晩生）、つきはやか（早生）、つきあやか（中生）、つきすずか（晩生）、つきことか（極晩生）
	早生品種	中生・晩生品種	モミロマン							
出穂後日数	25～30 日	30～40 日	40～50 日							
たちあやか（中生）、たちすずか（晩生）、つきはやか（早生）、つきあやか（中生）、つきすずか（晩生）、つきことか（極晩生）										

項 目	作 業 内 容
<p>(2) 秋まき飼料作物のは種</p> <p>(3) 稲わらの収集</p>	<p>注意するとともに、保管場所周辺の環境整備（草刈り等）を定期的実施する。獣害が心配な場合は電気牧柵の設置も検討する。</p> <p>イ 飼料用米</p> <p>多収品種の場合は、コンバインへの負荷を低減するため、低速走行や刈り取り条数を減らす等の対策が必要である。</p> <p>乾燥経費を下げるため、倒伏や脱粒、気象条件に問題がない範囲で、立毛状態での乾燥（立毛乾燥：写真2）も有効である。立毛乾燥による籾水分18%以下の目安（地域や気象条件により増減）は、早生・中生品種は出穂後50日、晩生・極晩生品種は60日とされる。最終的には、貯蔵時のカビ・腐敗の防止のため、乾燥機で15%以下に仕上げるのが重要である。</p> <p>本県のイタリアンライグラスのは種適期は、10月上旬～11月上旬で、は種量は10a当り3～4kgが基準である。不耕起栽培やは種時期が遅れた場合は、4～5kgとやや多めには種することが望ましい。は種後は、種子と土壌の密着度合を高め、発芽を早めるため2～3cm程度の覆土・鎮圧を行う。鎮圧は発芽を早く揃えるだけでなく、表層の凸凹をなくし、収穫時の“土の混入”を防ぐとともに、冬期の土壌乾燥を軽減する効果もある。</p> <p>稲わらの収集は、天候や圃場条件によるが、できるだけ晴天が3日以上続く日に行うことが望ましい。向こう1ヵ月の降水量は多く、日照時間は少ない見込みなので注意する。コンバインからバラ落としされた稲わらをロールベアラで収集する場合は、テッド・レーキ等で反転し十分に予乾してから行う。水分15%程度まで圃場乾燥できれば、そのままの貯蔵が可能である。しかし、やむを得ず乾燥が十分に行えない状態で高密度にロールベアラに梱包する場合には発熱やカビの発生等の品質劣化が生じるので、ラップフィルムで密封する必要がある。</p>



写真2 立毛乾燥



写真3
ロールベアラによる稲わらの収集

(作成 畜産研究センター)